

参加型・行動型アクティブラーニングの実践： 全学共通教育科目「地域情報発信論」を事例として

馬本 勉*・中瀬古 哲**・塩川 満久***・五條小枝子****

県立広島大学

(*生命環境学部・**人間文化学部・***保健福祉学部・****総合教育センター)

1. 背景と目的

県立広島大学は、教育ネットワーク中国(注)の会員として各種事業に参画しているが、本年度から、本学が担当校となり、中国新聞社寄付講座を開講することとなった。

本学での開講科目名は、「地域情報発信論」とし、全学共通教育科目の「複合科目」群に配置することとした。授業の目的は、「地域の情報を広く伝える新聞の役割を学び、地域に密着したテーマについて取材、記事の編集、発信に至る一連の流れを体験することを通じて、地域情報の発信力を身につける」と定めた。地域情報の発信のためには、取材活動が重要な前提となる。これを素材とすれば、参加型・行動型アクティブラーニングをより意義のある実践にできるのではないかとこの予測の下、平成25年11月から検討を開始した。

2. 授業設計の検討

寄付講座の中国新聞社側の統括責任者は、経営企画局読者広報部「教育と新聞」推進担当の立場にある。「NIE教育に新聞を」は、「学校などで新聞を教材として活用」し、もって「社会性豊かな青少年の育成や活字文化と民主主義社会の発展など」を目ざす事業であり、本寄付講座もその一環である。若年層に新聞への親しみを抱かせ、関心を持ってもらいたいという思いもあるだろう。そのような企図を含みつつ、大学の授業として成り立たせるにはどう設計していけばよいのかという観点で、協議を重ねた。

1) 十分に新聞に親しんでいない学生を想定し、第一段階として新聞の紙面の構成や記事の作成等についての解説を設けることで新聞への理解を促すプログラム(5コマ相当)の提示があったが、新聞は、あくまでも講義の素材として扱い、導入は、社会における新聞の役割や使命についての概説とすることを要望した。

2) 新聞記者は社会現象をどう捉えるのかという分析の視点、あるいは地域との接点、記事を制作する上で苦悩していることなど、生の声を聞かせて欲しいと要望した。

また、学生が取り組む課題は、取材－編集－発信の過程を丁寧に迫うことを前提とし、議論の内容を深めるために、テーマを絞り込み、賛否が分かれ容易に決着しがたいものを選んだ。被爆再現人形撤去問題と旧市民球場跡地利用問題である。

3. 当該授業の特徴

本科目の最大の特徴は、まず、新聞社の協力により、現役の記者やカメラマンから、学生に生の刺激を与えることができる点である。次に、それを、“取材”という形で追体験し、新聞記事としてまとめる、あるいはグループディスカッションを経て提言にまとめるというプログラム構成にしたことである。学生は、問題意識をもって授業に臨み、自分の言葉

や枠組みの中で問題を捉え、グループディスカッションでは、様々な考え方・捉え方があることを知り、立場・視点の相違を知り、そのことによって自らの認識を見直すことができる。下に授業内容の概要を示しておく。

2014年度「地域情報発信論」授業内容

時限	内容
1	① 新聞の読み方と取材の裏側（記者の仕事とは） 講師：中国新聞社 広報部長
	② 取材対象を見る目：被爆再現人形を題材として＝情報を仕入れる 講師：中国新聞社 平和資料館担当記者
	③ 取材計画「被爆再現人形をめぐって」→ 取材メモの作成
2	④ 新聞記事の特性：視覚に訴える 写真撮影の視点 講師：中国新聞社 編集映像部担当部長
	⑤ 取材（1）「広島平和記念資料館」 取材及び写真撮影指導と資料館学芸員への囲み取材
	⑥ ディベート「被爆再現人形、保存か撤廃か、第3の方法か」＝論点の整理
3	⑦ 記事風レポート作成の手法 講師：中国新聞社 経営企画局読者広報部担当
	⑧ 記事風レポートの作成 グループディスカッションで意見の相違を確認する
	⑨ 取材対象を見る目：旧市民球場跡地利用を題材として 講師：中国新聞社 市政クラブ担当記者
4	⑩ 新聞情報の分析と取材計画 ー過去記事の把握を通して現状の把握を試みるー 講師：中国新聞社 経営企画局読者広報部担当
	⑪ 取材（2）「旧市民球場跡地」
	⑫ グループワーク「街のにぎわいを取り戻す」 提言の骨格を決める
5	⑬ グループワーク「提言の設計図作成」 講師：中国新聞社 経営企画局読者広報部担当
	⑭ プレゼンテーション：提言の発表と質疑応答
	⑮ ふり返り → 課題：各自が新聞への投書形式にして提出

※ 評価基準 I. 学生の作成した新聞記事（中国新聞社の担当者が採点） II. 投書形式で提出された学生の意見（学内担当者が採点） III. 受講態度（授業への参加度）

4. 授業を終えて — 成果と展望 —

- 授業設計の過程では、中国新聞側と教員との考えをすりあわせることに重きが置かれた。そのため、双方が新たな認識を得ることができた。
- 中国新聞社の授業運営は、今まで培ってきたノウハウを活かしたものであり、大学の教員としても参考にできる点が数多くあった。一例を示せば、授業の冒頭に、その日の目標を明確に示すことである。これにより学生自身がその日の見取り図を描きながら授業に臨むことができる（集中講義という形態ならではかもしれない）。
- 取材において、事前の情報収集は不可欠であり、論点を整理してから臨む必要があるとの指摘は、思考を深めるためのポイントであり、学問研究に通じる姿勢でもある。学生には、大学の教員からではない新鮮な刺激として浸透しやすかったのではなかろうか。
- テーマ設定では、対象が絞られていて焦点が明らかであったことが効を奏した。答えの出ない矛盾をはらんだ問題を選定し、それにジャーナリストはどう対処したかという情報を提供した点が、学生の興味、関心を揺さぶり、多様な受講動機と能力の学生を結びつけることができた。
- 二つの話題を柱として授業を構成したが、話題と話題の繋がりが難しかった上に、学生の思考がやや拡散してしまった感があった。思考の深まりを促すには、テーマは一つに絞り込み、時間をかけて取り組ませる方が効果的ではないかと思われる。
- 本科目での経験が一過性の刺激にとどまることなく、能動的に授業に臨む姿勢として定着させるためには、継続的な働きかけが必要であり、それが今後の課題といえる。

注：「教育ネットワーク中国」は、広島の高専機関の連携・協力により、各大学の学生の多様なニーズに応え、学ぶ意欲をもった人たちにより多くの学習機会を提供することを目的として1998年に設立された一般社団法人である。